私がなぜ現在の科目を選んだか

「産婦人科」

信州大学医学部産科婦人科学教室
井　田　耕　一

「ゆりかごから墓場まで」は第２次大戦後のイギリスの社会保障制度の基盤となったスローガンです。私はこれが産婦人科を説明する最適な言葉ではないかと考えます。

私が産婦人科を意識したのは医学部５年生の頃，ちょうど臨床実習が開始した頃でした。当初，小児科や総合内科に興味がありました。ただ，外科を回ると，せっかく医師になるなら手術をしたい，という願望がうまれ，できれば全部やってみたい，という漠然とした思いにつながりました。

こうした中で産婦人科を回ると，漠然としたものがより具体的になりました。きっかけは，お産と帝王切開でした。夫婦のご厚意で，我々のポリクリチームは全員でお産を見学できました。お産はスムースに進行し，非常に元気な産声を聞くことができました。赤ちゃんは無邪気に泣き，大仕事を全うした「お母さん」は疲れを微塵も感じさせず，夫と共に笑顔で赤ちゃんを見守っていました。私はこの場面に非常に感動し，「これは良い」と突き動かされました。また，帝王切開にも立ち会い，「やってみたい」という衝動に変わりました。圧倒的なスピードで赤ちゃんが取り出され，羊水にまみれながらも，生きようとする懸命な産声を聞き，この命が新生児科医に手渡される流れの中，手術を行う産科医の姿は，まさに「職人」のようでした。

一方で，癌患者の治療という，お産とは別カテゴリーが産婦人科に存在することを，実習中に教えてもらいました。治療は日々発達するけれども，救えない患者も沢山いて，中でも家族を残して亡くなっていく癌患者の「お母さん」の話が印象的でした。

赤ちゃんから亡くなる方まで，まさに先のスローガン「ゆりかごから墓場まで」を診る科は他にありません。現在，産婦人科医となり，多忙な日々を送りながらも，赤ちゃんの産声に癒され，また一方で癌に苦しむ方が軽快して笑顔になっていくのをみると，学生当時の衝動が鮮やかに蘇ります。

（信大平19年卒）

私がなぜ現在の科目を選んだか

「呼吸器外科」

信州大学医学部外科学第二教室
竹　田　　哲

自分は父親が消化器外科医でした。父親は自宅から20 km 程度離れた病院に勤務していましたが，自分が幼少期はまだ携帯電話のない時代，大きな手術の後や，状態不安定な患者さんがいたりすると病院に泊まることが普通であり，子供心にそれを普通と感じていました。その後ポケベルや携帯電話の普及，また父親もベテランとなっていくにつれて徐々に自宅に帰ってくる日が増えていきましたが，そんな父親からは「外科はきついし，昨今外科医になりたい人も減っていて，今後もきつくなるだろうから，やめたほうがいい」と言われました。

自分も医学部に入り，医学部野球部での練習をしながら臨床実習が始まると，長い手術の見学の日は「今日も練習行けない，嫌だなあ」と感じていました。ところが研修医となり，手術に助手として入り，手術の手順や手技一つ一つの理由を理解していくと，「手術ってこんなに面白いんだ」と感じるようになりました。研修医のころは整形外科や脳外科と迷い，癌を扱う科に魅力を感じて外科を選択し，外科入局後も消化器外科と迷って呼吸器外科を選択しました。正直，他の科を選んでいたとしても後悔することはなかったと思っていますが，呼吸器外科を選んでよかったと思います。理由は単純に手術が面白いこと。肺の血流量というのはものすごく多い割に，肺循環は低圧系なので血管壁が薄いのです。肺切除術では，肺動静脈の血管鞘という薄皮１枚を剥離していくところが醍醐味であり，少し血管側に深く入りすぎると大出血となりうる操作なのですが，うまく血管を剥離し終えて処理できた時はとても安心します。現在信州大学病院は常勤の呼吸器外科６人と少ないですが，手術の楽しさを学生や研修医に理解してもらえるよう日々努力しております。

最後に，外科医ならみんなそうだと思いますが，自分の手術した患者さんが元気に退院していき，外来で元気な姿を見せてくれることが自分に力を与えてくれており，これに尽きると思います。

（信大平20年卒）